



卷頭特集 ■ 中国ヘルステック市場調査レポート

アフターコロナも 急成長の 中国オンライン 医療市場





2020年に新型コロナウイルス（COVID-19）感染症が世界的に大流行するなか、中国では「インターネット+（インターネットプラス）」医療に大きな注目が集まった。「インターネット+」とは、インターネットを活用して既存産業の競争力強化を図ろうとする中国政府による国家戦略のこと。

スマートフォン（スマホ）を介してネット上で気軽に医師とのやり取りや問診サービスを受けられるだけでなく、医療機関でのヒト混みを回避したり、殺到する患者を効率的に減らしたりできるのが大きなメリットだ。また慢性疾患患者や軽症患者にとっては、

外出しなくとも自宅で療養できるのは大きな安心感に繋がった。

新型コロナの流行期には、阿里健康、平安好医生、微医、丁香園、春雨医生などのオンライン医療プラットフォームが、無料のオンライン問診サービスや医薬品のEC（電子商取引）、コロナ防疫対策に関わるコンテンツや感染状況などの情報を提供。短期間でユーザー数を大きく伸ばした。

同時に、オンライン医療機関の設立も急増した。

2020年の第1四半期には、国家衛生健康委員会が管轄する医療機関のオンライン診療室の数が前年同期比17倍で増加。浙江省では省主導のオンライン医療プラットフォームが設置され、50を超える医療機関がネットワークで結ばれた。

衛寧健康、創業惠康、東華軟件など医療関連のソフトウェア企業は、医療機関のオンライン業務システムの構築をアシスト。オンライン問診や遠隔回診などの業務に貢献した。

新型コロナの流行は、オンライン医療業界にとって大きな発展の契機となった。中国政府も関連政策を公布して業界の発展を推進している。当会報誌でも、2020年5月号で、当時のオンライン医療の発展状況をレポートしたが、その後も業界は急成長が続いている。

中国EC大手の京東（JDドットコム）傘下の京東健康（JDヘルス）が香港



浙江省のオンライン医療プラットフォーム

で上場。

アリババ系の阿里健康（アリヘルス）は、公式アプリ「医鹿」の運営を開始した。

中国保険大手の平安保険傘下の平安好医生（Ping An Good Doctor）は、サービスを「大健康」（医療を含む健康関連全般）領域へと拡大。名称も「平安健康」に変更した。

アフターコロナの時代を迎え、ウイルス防疫が新たなライフスタイルの1つとして定着するなか、中国のオンライン医療業界は今後どのような発展を遂げるのか？

以下で詳細な紹介と分析を行ってみたい。



オンライン医療プラットフォーム・春雨医生

オンライン医療（ヘルステック）とは何か？

中国で「線上医療」と称されるオンライン医療。“医療×テクノロジー”を掛け合わせたヘルステックのことだが、中国にはすでに多くのサービスモ

デルが存在する。

現在中国で普及しているのは、主にネット診療受付（挂号）、オンライン問診、遠隔医療、オンライン医療機関、

オンライン医療・商業保険決済システム、医薬品EC、医療機関の情報化管理、慢性疾患管理・健康管理、人工知能（AI）などだ。

中国オンライン医療はいかに発展してきたか？ 2018年から中国政府も政策で後押し

中国でのヘルステック、つまりオンライン医療業界は、2000年に運営を開始した医療従事者向けアプリの「丁香園」が先駆けとなった。

その後、2006年に三甲医院（最上ランクの大型医院）の医師を集めた「好大夫在线」が運営を開始。

2011年には軽度の問診サービスを主要業務とする「春雨医生」が運営をスタートするなど、大手各社が参入し、オンライン医療業界はさらなる発展段階を迎えた。

2014年から16年にかけては、ベンチャーキャピタルによる投資も活発となり、業界全体が高度発展期に入る。一般問診、軽度問診、オンライン受付、医師用ツール、中医（漢方医）、医薬品EC、医薬品デリバリー、医療美容、トレーニング、身体検査など、各領域の企業が出揃った。

なかでもアリババ系の阿里健康（アリヘルス）、平安保険系の平安好医生（2021年に「平安健康」に改称）、そして百度（バイドゥ）の3社が業界大手とされている。

2016年から18年には、オンライン医療のビジネスモデルがなかなか定着せず、倒産する企業も現れた。ベンチャー投資も業界を回避しはじめ、国の政策によるサポートもやや



滞るなど、業界は停滞期に入った。

ところが2018年に入ると、オンライン医療・健康（ヘルステック）企業の上場ブームが起こった。ウェアラブルデバイスの華米科技が上場したのをはじめ、平安好医生、「1薬網」の親会社である111集団も上場を果たす。

医療美容領域の垂直（専門）プラットフォーム「新氧科技」も上場に成功。ベンチャーキャピタル業界から改めて注目される契機となった。

同時に、国の関連政策も相次いで打ち出された。

中国政府・国務院弁公庁が公布した『インターネット+医療健康』発展促進に関する意見

では、オンライン医療や医療機関の存在に言及。政府が初めて業界を公式に認めた形となった。

2018年9月には「インターネット医療機関管理弁法（試行）」、「インターネット診療管理弁



医薬品ECプラットフォーム・1薬網

家電、教育、医療から警察、
司法まで応用広がる
アリババ、百度、
科大訊飛が牽引する
中国AI音声認識

人工知能（AI）技術の発展により、中国の音声認識市場が急成長を遂げている。

音声認識技術は、AI 領域で最も早くから発展が始まった分野で、商業化も進んだ。ここ数年は、ディープラーニング技術の進歩に伴い、識別の正確性も大幅に上昇し、実用化がさらに進んでいる。

この業界を代表する科大訊飛（iFLYTEK）、捷通華声（SinoVoice）などのほか、思必馳（AISpeech）、雲知声（Unisound）、出門問問（Mobvoi）などの新興スタートアップ企業の発展も目覚ましい。またインターネット大手の百度（バイドゥ）やアリババなども、積極的に参入している。

教育、カスタマーサービス、通信などの業界のみならず、自動車業界ではテレマティクス、また住宅、医療、スマートハードウェアなど様々な領域で応用が進んでいる。スマート化が進む昨今、音声によるオペレーションをメインとしたツールも増えつつある。

今後、音声認識技術やスマートフォン（スマホ）、タブレットなどの IT・電子機器の進化がさらに進めば、誤認識などのトラブルも減少して、使い勝手はより改善していくだろう。中国の音声認識市場は、今後もさらなる拡大が予想されている。

音声認識技術とは？

聞き取り—理解—回答が主体

音声認識技術は、自動音声認識、自然言語処理、テキスト音声合成の3つの主要技術で構成される。ヒトと機械



との完全な対話は、「聞き取り—理解—回答」という3つのステップで行われる。

まず「聞き取り」に必要なのが自動音声認識（ASR：Automatic Speech Recognition）技術、そして「理解」には自然言語処理（NLP：Natural Language Processing）技術、最後に「回答」はテキスト音声合成（TTS：Text To Speech）技術だ。

テキスト音声合成（TTS）技術は発展が最も早く、すでに幅広く応用も進

んでいる。合成された音声がいかに機械的である点を除けば、特に大きな技術的問題は存在しない。

自動音声認識（ASR）技術は、2012年に「畳み込みニューラルネットワーク（CNN）」の応用が始まってから、その正確性が大幅に向上し、こちらもすでに幅広く使われている。

自然言語処理（NLP）技術は、検索エンジンなどで使われているが、その機能はまだ改善の余地も大きい。

中国の音声認識市場規模

2021年に195億元に

ここ数年、中国の人工知能（AI）による音声認識機能の需要は、消費市場を中心に急拡大を続けている。

インターネット企業やスマートデバイスメーカーは、音声認識領域への投資を増やし、スマートスピーカーメーカーもスマートホーム市場でのシェアを獲得すべく、大幅に価格をディスカウントするなどして熾烈な争奪戦を繰り広げている。

IT専門の調査会社・IDC中国によると、中国の音声認識技術応用の市場規模は2019年に12億2,490万米ド

ルだったもよう。スマートホーム分野での製品市場のほか、カスタマーサービス、法廷審理の際の音声文字自動変換などの分野で幅広く普及が進んでいる。

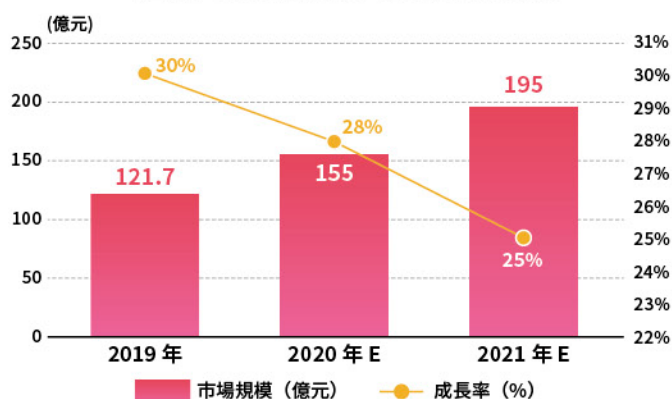
一方、中国政府系シンクタンクである賽迪智库の統計では、2019年の中国の音声認識の市場規模は121.7億元と算出。AI技術の成熟と応用の進化に伴い、今後も同市場は年間約25%の成長を保ち、市場規模が21年には195億元に達すると見込んでいる。（図1：中国のAI音声認識市場規模）



スマートスピーカーはスマートホームの制御センターの役割を担う

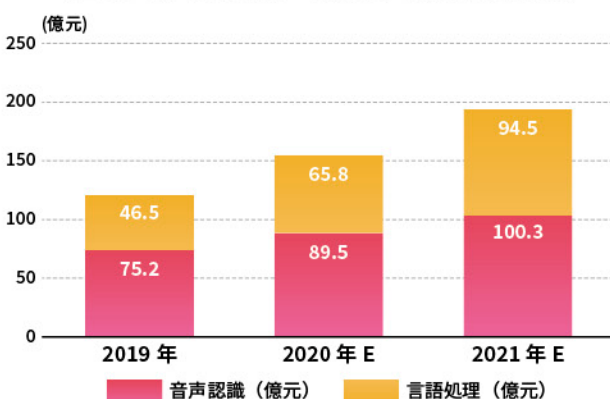
セグメント別に見ると、スマートスピーカーなどのインタラクティブ（双方向）型製品の市場が飽和状態に近づく一方で、医療、教育、金融などの領域で、言語処理技術の需要が高まっている。（図2：中国のAI音声認識市場の機能内訳）

【図1】中国のAI音声認識市場規模



出典：賽迪智库

【図2】中国のAI音声認識市場の機能内訳



出典：賽迪智库